ニホンザルの母子行動

糸魚川　直　祐（大阪大学人間科学部）

Ⅰ．社会的場面における母子行動（昭和58年度）

ニホンザルの母子は，集団の中で他の母子や仲間たちと社会的関係を持って行動している。このような社会的場面において，本年度では以下のような研究を行なう。(1) 経産と初産事例についての母子行動の比較，(2) 経産事例について母の加齢にともなう母子行動の変化，(3) 母の社会的順位による母子行動の違い，(4) 母子と成体雄の行動の相互連関性などの究明。このような研究のおもなねらいは，子の発達初期においてとくに重要な役割をはたす母の子に対する行動を分析し，それが母の出産歴，年齢，集団内の社会的順位などによってどのように異なるかを追究することである。

研究対象は，岡山県真庭郡勝山町神庭渓谷に生息するニホンザル集団（成員総数約270頭）内の母子約20ペアであり，それらの行動及び仲間との行動をＶＴＲにより記録し，映像を分析し，また通常の行動観察により，上記の研究の資料を収集する。

Ⅱ．子の成長と母子行動の変容（昭和59年度）

子の成長にともない，母子行動はさまざまに変化するが，子が1歳以上になったとき，つまり子が母の哺育を直接必要とせずに集団内で生存できる年齢になって以後，母子行動がどのように変化するかを追究する。本年度の研究では，(1) 子の性別による母子行動の違い，(2) 子の独り立ちに及ぼす母の役割，(3) 雄の未成体，準成体における集団内の周辺化と集団からの離脱について，母や仲間の影響，(4) 雌の未成体，準成体に見られる幼体に対する保育的行動，(5) 子が成体になり，さらに老体になったときの母子行動の変化などをおもに追究する。

研究対象と方法は前年度とほぼ同じであるが，子の成長にともなう母子行動の変容については，従来の研究を基礎に，縦断的及び横断的研究を行なう。

Ⅲ．母子の行動異常と治療的方法（昭和60年度）

社会的場面においては，ほとんどの場合母子は健常な行動をいとなんでいるが，母子を社会的場面より隔離し，実験室場面で飼育しその行動の変化を調べると，さまざまな異常が生ずることがこれまでの研究から明らかになっている。本年度の研究では，前年度までの研究をもとに，次のような研究を行なう。(1) 行動異常の発現機序について，母あるいは子を対象に，隔離飼育開始の年齢と隔離飼育の時間的長さを実験条件にし，行動異常の類型を手がかりに追究を試みる。(2) 行動異常が生じた場合，治療的方法を講じなかったときの長期的変容の経過を追跡観察する。(3) 行動異常が生じた母あるいは子に対し，他個体との出会せによるいわゆる社会的治療方法の有効性と限界を明らかにする。

研究対象は，実験室で飼育する母子6ペアとし，さらに統制群として数ペアの母子を用いる。行動分析としてＶＴＲを使用する。

昭和58年度研究報告

野外に生息するニホンザル集団（岡山県勝山）において，母子行動を母の出産歴，社会的優劣順位，個体的特性などと関連づけて調べた。初産の母は経産の母に比べ，出産後間もない時期では子の取扱いにやや未熟さが認められ，母子は近接することがより多かった。しかし初産母と経産母とのこのような差は，子の成長にしたがって少なくなり，母子行動の差は母の社会的優劣順位や個体的特性によるところが大きくなった。社会的優劣順位の高い母子は低いものに比べ，一般に近接の程度が低く，母の子に対する行動の規制の程度も低い。このような差は，子の社会的優劣順位の形成や仲間関係の成立に重要な影響を及ぼすと思われる。母ザルの中に生後1年未満の幼い子を放置したり，乱暴な取扱いをするものが例外的にいたが，その程度は子を死亡させるほどではなく，このような子に対しては，集団の他の成員，とくに

成体雄が母に代って子の世話をする行動を示した。集団の中での母子行動は，集団の他の成員との関連でとらえられなければならず，その背景として集団全体の長期間にわたる繁殖活動を追究しなければならないことがわかった。